

[研究ノート]

蕪村画の魅力

—俳諧連歌からの著想—

ここに載せた絵は蕪村晩年の作で、桃林騎馬画賛と名付けられています。桃の花の淡い紅色と言いつの葉の薄い緑色と言いつ、絹本の明るく暖かい風合と相俟って、春の情景をよく表わしています。賛の七言絶句は唐の詩人竇鞏（とうきょう）のものようですが、特に、結句の「馬ハ春泥ヲ踏ム、半バ是レ花」の句が大変よく効いています。この結句の情景を蕪村はちゃんと描き込んでいます。よく見ると馬の脚元、若草に混じって桃色の花びらが散らしてあります。正に雨後の花見の図と言ったところですね。

ところが目を桃の木の上にやりますと、薄墨の外隈（そとぐま）で描かれた円に気がきます。まさか太陽ではありませんまい。その描法から見ても、これは満月に違いありません。暖かく明るい花見の図と中天にかかる満月、この組合せはいったいどういうことなのでしょう。

花から月への転、ここで思い起こされるのは連歌の世界ではないでしょうか。連歌では花と月は最も重要なテーマであり、花から月への変転はしばしば出て来ます。蕪村の俳歴を調べますと、当時の発句の流行に逆行して、後年は俳諧連歌（連句）に強い関心を寄せています。一句一句完結する傾向の強い発句よりも、変化に豊んだ連句の世界に、蕪村は興味を持っていたのでしょうか。連歌の面白みは何と言ってもその付合（つけあい）の妙にあります。他人の作った前句（五七五）にどのような句（七七）を付けるか、次にそれにどのような五七五を付けてくれるか、その展開は誰にも予測できません。同事、同趣を嫌う連歌では、前句の内容を踏まえつつ、如何に変化に豊んだ次の世界を開くかが

桃林騎馬画賛
絹本淡彩
与謝蕪村筆
一〇七・三×四三・五センチ
逸翁美術館蔵



最大の関心事になります。では、この蕪村の絵を連句的に見るとどのようなになるのでしょうか。

賛は「雨があがった、誰といっしょに花を見にゆこうか」と、発句を提出します。蕪村はそれに添うように、花は桃にし、伴は自分の従者にして、脇句を付けたようです。そして今度は第三句として大きな変化を与えます。心浮き浮きする花見であった、時を忘れて家路につけば、時あたかも満月が上ぼる。「自分達の見て楽しんだ桃の花は、今夜は月に照らされて咲いているであろう。」

一幅の絵の裡に何と豊かな世界が展開するではありませんか。蕪村晩年の絵の中には、こうした俳諧連歌の著想によって描かれた絵が他にも多く見出せます。日本における文人画の大成者の一人と言われる蕪村が、日本特有の文芸の発想をその中に持込んだ点に、私は非常に興味を覚えます。

（早川聞多）

季刊 美のたより No.58

昭和57年 3月 4日

発行 大和文華館